



住宅的／木漏れ日／愛郷、 子どものための 小規模医療・福祉空間について

藤木隆男 ■ 藤木隆男建築研究所 代表取締役

「地域で育てる子どもの環境」という表題に対し、その専門研究者ではないが、これまでいくつかの子どものための施設を設計する機会を得た筆者とそのアトリエが日ごろ考えていることを、3つの小規模な施設事例を紹介しつつ書いてみたい。

このところ高齢者介護施設整備の在り方として「地域包括ケア」という方式が提唱されているが、永年暮らしてきた地域内でのお年寄りの生活、見守りや介護・医療などが十全に保障されていることはとても望ましいことであるとされる。それは、子どもを取り巻く居住、保育・教育、医療、福祉空間・環境のよりよい整備についても、ほぼ同じ意味で求められている。そして、その質的あり方はどの場合であれ、「住宅的な空間性」「木漏れ日のような状態」「愛郷の精神」といったキーワード、言説や概念で表されるのではないだろうか。

学校や医療・福祉施設などが「住宅に近い居心地」、つまり、多少の緑陰をもち、陽当たりや風通しがよく、木質系の素材や触覚的な造形でつくられ、インティメートな空間スケールをもつこと。ハレとケの場面（空間的にも、時間的にも）、ユーザーとしての子どもと大人（やお年寄り）、スタッフや近隣住民の生活や活動、建築と庭・広場などの外部空間、歩行者と駐車する車や自転車などがほどよくミックスされて同時に存在し、網目状に繋がった「木漏れ日状」に存在する環境／状態。そして子どもたちが属する一定地域の風土的個別性や地域特性に誇りと愛着をもち、必ずしもスタンダードによらず習慣と地域的価値観にこだわりをもつ「愛郷の精神」。また、それらがバランスよく整えられ、満たされた場所こそが、地域における子どもたちの相応しい成育／生活環境と言えるのではないだろうか。

子ども在宅クリニック 『あおぞら診療所・墨田』

『あおぞら診療所・墨田』は、重い障がいや疾患をもち医療ケアを必要とする子どもとその家族のための、都心における数少ない在宅医療の拠点である。建築計画は、オフィス仕様の賃貸ビルの1フロアを、住宅的で小規模な「無床診療所」と在宅医療活動の大型の拠点としての「訪問看護ステーション」へ改修、平成25年10月に移転したものである。

クリニックによると、訪問患者数は東京都23区を中心に170人。訪問開始年齢は生後1カ月から30代半ば（うち20歳以上は5%）。原疾患は、脳性麻痺、多発奇形症候群、先天性脳神経疾患、悪性腫瘍ほか。人工呼吸管理4割強、気管切開4割強、経管栄養約8割。平成23年クリニック開設以来35人が亡くなり、うち14人が自宅での看取りを行ったという。

新生児医療における救命治療の進歩に伴い、人工呼吸器などの医療機器に依存せざるを得ない子どもが増えているが、超重症児は長期入院を続けるか、自宅で家族による介護で療養するのだが、その場合家族の疲弊や子どもの症状悪化などによる入退院が繰



写真1 『あおぞら診療所・墨田』。着席のまま全員のカンファレンスが行えるスタッフスペース（撮影…船元康子 『病院』73巻7号、2014、医学書院）



写真2 いつでもコーヒーブレイクできる会議・休憩スペース

り返されることになりがちである。「高度な医療管理が必要な子どもにとって家族と暮らすことは、かれらのQOLや幸せを考えた場合にきわめて大切なことであり、長期にわたるケアは家族で行うほうが子どもの発達成長の力が引き出され家族も安定する」という医師の信念が、このクリニックのきわめて多忙な日常活動を支えている。

新しい診療所は、東にスカイツリー、西に隅田川という東西に眺望の開けた駒形橋東詰めのオフィス空間(天井高2.8m、面積550㎡)に計画された。室内はすべて上足利用のフローリング張り、大半は「訪問看護ステーション」のスタッフスペースで占められている[写真1、2]。そこは、事務スペース24席、医局8席、作業・研修24席と会議・休憩コーナー15席程度がさまざまな形状のシナ合板の製作家具で緩やかに仕切られゾーニングされているが、全体として見通しのきくオープンフロアにまとめられている。ステーションの活動が、毎朝のスタッフ全員での着席のままのカンファレンスによる情報共有と高い機動力に基本を置いているためである。

これに対し、100㎡程度の診療所部分はガラスの入った木製の間仕切りで区画された3つの診察室を除き、待合ホールからキッチン、ダイルームまでが造形的で触覚的な特注家具(椎名啓二アトリエ作)で設えられ、緩やかにうねった連続空間としてつくられている[写真3、4]。そこは、主として訪問診療開始前の相談外来と家族のレスパイトのための一時預かりを想定したスペースとして考えられたものである。子どもと家族にとって、バリアフリーで清潔な診療所でありながら、温かく安心できる気のおけない住宅的でイン



写真3 楽しいリビング感覚の待合ホール。左が診察室



写真4 木製のオープンキッチンのあるダイルーム



写真5 プランの要にある円形の薬品庫。訪問看護の医療バッグを装填中(撮影…船元康子『病院』73巻7号、2014、医学書院)

ティメットな場所の雰囲気強調されている。

『あおぞら診療所・墨田』のプランニング上の特徴は、スタッフスペースと診療スペースとを視覚的にも機能的にも一定程度オープンに連続させつつ仕切る、平面上の「要」の位置にプロットされた薬品庫の存在である。それは高さ2mほどの湾曲する壁/収納棚・作業カウンターで囲まれ、薬品や医療機材をオープンに管理し、朝夕の訪問看護のためのチームの出動と帰還のホームベースの役割を果たす『あおぞら特有の活動スタイル』を追求する試行錯誤から生み出されたものである[図1、写真5]。

そして何より、この「あおぞらの3点セット/ステーション+診療所+薬品庫」の在り方は、訪問先のさまざまな住宅の構造や空間と連続的でサイクル的な空

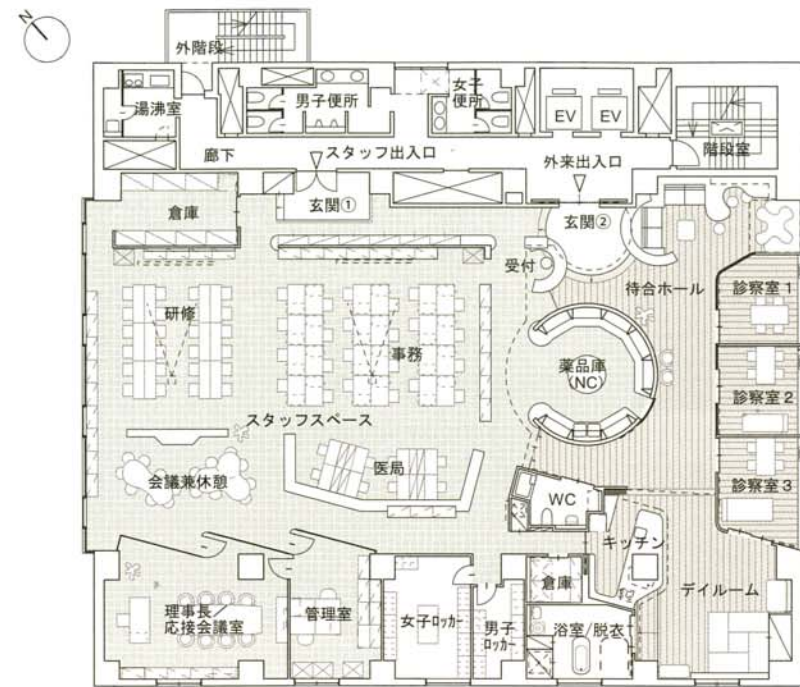


図1 『あおぞら診療所・墨田』平面図

間感覚と雰囲気をもち、対象となる子どもと家族にとっても、医療に従事する医師やスタッフの職場環境としても共有できる子どもの在宅医療のモデル的拠点、「もうひとつの住宅」であろうとする関係者の意志の表れなのである。

地域小規模児童養護施設『樅の舎』

地域小規模児童養護施設とは、これまでの大規模な

施設空間での子どもの養育から、住宅的・家庭的な生活環境の充実へという国の示す児童養護のビジョン(平成24年『社会的養護の課題と将来像』)に基づく、里親やファミリーホームなどの「家庭養護」とともに、小規模グループケアを地域の中で行うことをめざした「施設養護」のひとつの形態である。

児童養護施設「東京サレジオ学園」の分園である『樅の舎』は、武蔵国分寺史跡のある国分寺市西元町に計画された児童定員6名のグループホームである。それは大規模団地や戸建住宅・木造アパートなどに囲まれつつあるものの、まだ周辺に畑や緑地が多く残る陽当りのよい郊外住宅地に、L字型・2階建ての建物とそれに挟まれる庭とが一体になった6人家族(平成26年4月現在、小1…1名、小2…1名、小6…1名、中3…1名)の子どものための「家」としてつくられた[写真6]。

在来工法の木造構造物はそれ自体、人の居住には優しい雰囲気を醸し出すが、北欧製モダンデザインの家具、照明などを用い、白い漆喰左官仕上の内装により、明るく清潔で温もりのある居心地を得ている[写真7]。南東側の庭は、2面の狭い道路に対し低い土手と垣根で接し、主として雑木やブッシュ状のかん木を植え込んだいわば『ワイルドなガーデニング』である。それは、周辺地域とこの「家」との接し方、つまり室内からある程度通りが見え、外からは住まい手の暮らしぶりが感じられる、「地域小規模」の町の中でのあるべ



写真6 『樅の舎』外観全景。手前は桑畑



写真7 リビングからキッチン/ダイニングを見る



写真8 家の中から庭を通して通りを見る



写真9 輻射冷暖房パネルのある木質仕上の児童居室

き姿を恵まれた形で表現している【写真8】。

児童居室(2人室1、個室4)は、子どもの日常生活の重要な拠り所である。こもすべて木質系で設えられているが、いわゆるエアコンではなくパネル式輻射冷暖房を採用し、清浄でごく緩やかな室内温熱環境の確保が試みられた【写真9】。子どもの生活環境の理想を追求したこの『樅の舎』は、定員106名のどちらかと言えば大規模施設である本園(東京サレジオ学園 小平市)の改築後20年にわたる子どもの生活環境改善の経験と実践の成果であり、今後の児童養護の在り方への試行でもある。

施設の住宅化、地域化をめざして平成17年にスタートした『樅の舎』であるが、その活動実績は、延べ入居者数11名、大学、就職などによる卒園4名、家庭復帰1名である。サレジオ学園季刊誌『ほとす News no.15 平成24年度』の中にある児童指導員養護報告に、次の一節が見られる。「……今年もたくさんの地域の方々に支えられた1年だった。何もわからない新寮長の私に一つひとつ優しく教えてくださった近所の方々、中には、児童養護施設やグループホーム等に興味を持ち積極的に理解してくださる方もいらっしゃる本当にありがたかった。今となっては、もはや子どもたちの成長と地域の方々の関わりは、切っ

も切り離せないほど強くなってきている。これからも、このあたかな関係を大切に、私たちもさらなる努力を重ね、地域の一員としての存在でありたい……」。

ここは、必ずしも西国分寺に地縁のないたった6人の子どもの家であるが、資質の高いスタッフ/行政、学校、地域住民による「社会的養護」がよりよく行われようとしている、稀有なケースかもしれない。しかし、少なくとも「地域」/「小規模」であることは、長年サレジオの建物管理をサポートしてきた筆者の目から見る限り、本園の施設内養育よりも子どもたちにとって望ましい生活環境のカタチができていると思えるのである。

聖ヨゼフ寮 放課後学童クラブ『まりあ』

大分県中津市郊外にある「児童養護施設聖ヨゼフ寮」の広大な敷地の中に、「放課後学童クラブ『まりあ』」がある。養護施設本体は、定員35名、木造2階建て、延べ1,300㎡の建物で、戦後数十年、学校と児童養護施設、修道院・聖堂をもつ広大な牧草地の中のカトリック・キリスト教系ヨーロッパ寄宿学校スタイルの施設であった旧園舎を改築、整備したものである。それは、緩勾配片流れ屋根のいくつかの低層建物；児童棟2棟、事務棟1棟、厨房・洗濯棟および小聖堂を渡り廊下で連結したある種「お屋敷または地域集落」の観を呈する【図2】。つまりその改築は、もちろんそれまでの伝統的な大舎性・集団養護スタイルの踏襲ではなく、かといって先進の小規模ケア/社会的養護スタイルでもない、大分県中津地域「豊後・山国川流域の田園」の牧歌的人心、風景/風土への回帰という特有の性格を持っていたのである。改築時すでに傍らで活動が始まっていた「放課後学童クラブ『まりあ』」だが、養護施設改築整備対象から外れ、プレファブの小さな箱のような建物をその活動拠点として、さらにしばらくの期間の不自由をしのがなければならなかった。

本園改築後8年を経た平成24年、ようやく悲願である『まりあ』建設を果たし、寄棟の木造大屋根の下、裸足で家中を走り回れる清潔で温もりをもった分厚い杉・素地仕上げの床を全面に張った新しい活動の場を獲得したのである【写真10、11】。

それは本園建築とも通底する“牧草地に建つBarn…納屋”のような存在の建築で、週6日(第4土曜、日祭日除く)放課後の午後から夕方6時まで、30~40人ほどの学童が通ってくる(竣工後1年間の利用者数



写真10 放課後学童クラブ『まりあ』正面全景



写真11 ホールで遊ぶ子どもたちの様子

8,282名)。

この学童建物と別棟の屋根付き運動場、雑木林や畑・芝生のオープンスペースが用意されることで、この地域の子どもの平日の午後の居所のひとつはプリミティブながら過不足なく整備されている。その場所と活動の継続こそが、学校や家庭をサポートする素朴で地道な地域子育て空間たり得ているのではないかと。また、事業主である社会福祉法人の構想では、将来さらに敷地内に小規模な保育所をつくる構想もあるという。特に施設で働くスタッフや近接する一部地域の子育て家族の支援のためである。こうして児童養護施設本体、放課後学童クラブ、小規模保育所など、地域の子育て環境設備の緩やかな広がりは続いている。

以上、ここまでやや特殊で少ない事例ながら紹介してきたこれら各分野、各地域における子育て環境の条件やコンセプトに共通している空間の様相は、優れて「住宅的」であり、「木漏れ日のような場所や人の状態」を呈し、「愛郷」の気持ちに満ちた世界なのである。



写真12 聖ヨゼフ寮全景



図2 広大な牧草地の中の『聖ヨゼフ寮』と『まりあ』。配置図

ふじき・たかお

1946年山形生まれ。東京都立大学工学部建築学科卒業。坂倉建築研究所勤務を経て、1990年(株)藤木隆男建築研究所設立。東京都立大学工学部建築学科助教授、芝浦工業大学特任教授、明治大学客員教授などを務める。主な受賞に1990年「東京サレジオ学園」にて第14回吉田五十八賞、2004年「末広保育園・デイサービスふくじゅ」にて第9回公共建築賞優秀賞など